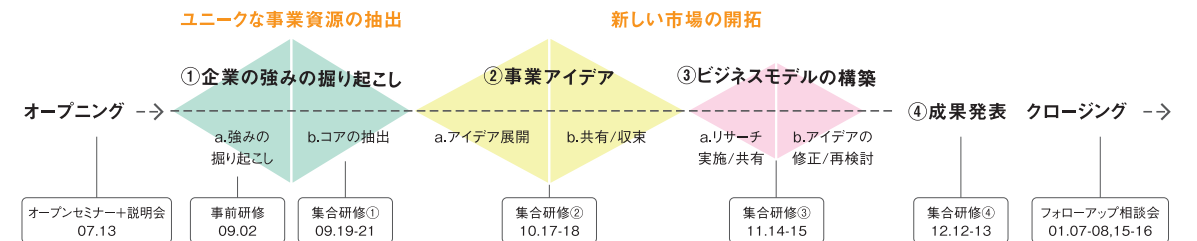
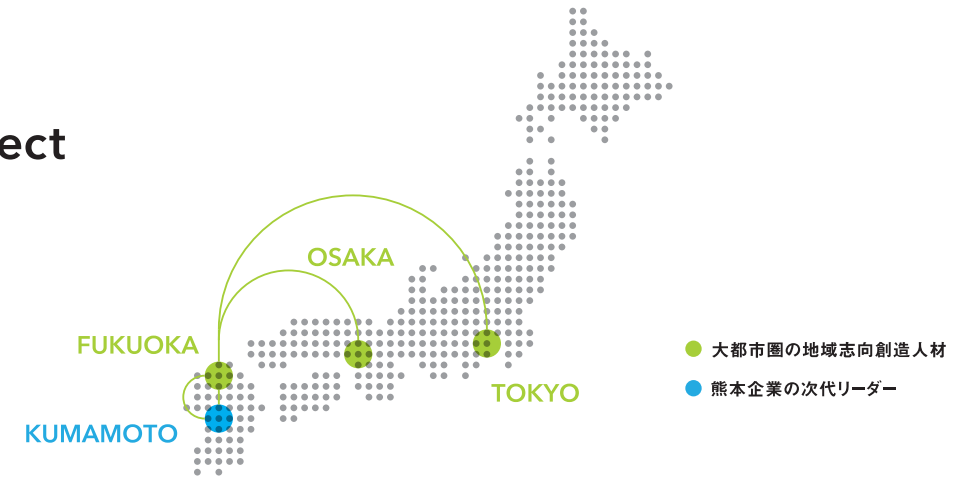


Project 180は、熊本県下の中小企業の次代を担うリーダーが、大都市圏から参加するサポートメンバーとチームを結成し、共に学び、共に考え、共に成果を出す、実践型の事業創造プログラムです。



Kumamoto Innovation School

Project 180



Project 180とは About Project 180

熊本イノベーションスクール Project 180は、熊本県下の中小企業の次代を担うリーダーと大都市圏から参加するサポートメンバーがチームを結成し、共に学び、共に考え、共に成果を出す、実践型の事業創造プログラムです。

熊本企業の次代リーダーとは、自社の将来の基幹事業となり得るビジネスを生み出し、リードする役割を担う存在です。熊本県下の中小企業における若手経営者や事業承継候補者、若手幹部候補など、企業の次世代事業を担うリーダーたちが参加します。一方、大都市圏のサポートメンバーとは、首都圏の大企業、中小企業などで中心的存在として働きながらも地域につながり、地域の特色ある企業の資源を活用しながら自身の創造性を発揮する機会を求める若手地域志向創造人材です。熊本企業の次代リーダーと、県外から参加するサポートメンバーで一つのチームを構成し、熊本企業の課題解決や新規事業創出に挑みます。

プログラムでは、自社の本質的強みを見抜き、新たな価値に転換し、マーケットにアプローチする一連のプロセスを、熟練のファシリテーターがリードしていきます。さらに、国内外の第一線で活躍するクリエイティブな事業家や、新しいマーケットづくりの最前線で活躍する実践者がメンターとして、参加企業の持つ潜在的な価値の掘り起こしから、社会潮流の分析、事業アイデアのアドバイスまで、全面的なバックアップをしていきます。

2020年度は、COVID-19(新型コロナウイルス)の世界的流行により、私たちは、働き方・ビジネスモデルの変革を迫られています。世界全体の行動・価値観が変化する今、熊本を舞台に、そして新たな世界に向けた新しい価値を生み出していくことに挑戦していく必要があります。日々の仕事から遠い存在のように感じてしまう「イノベーション」ですが、新たな知識や視点を取り入れ、自社の本質的な価値を捉え直すことで、新たな事業の可能性は大きく広がります。また共に学び、刺激を与え合う仲間やメンターたちとの関わりも大きな財産となっていきます。

Project 180は2018年にスタートし、今回で3期目となります。2020年度は県下の企業8社14名の次代リーダーと、東京や福岡など都市部から参加したサポートメンバー16名がチームを組み、現地とオンラインのハイブリッド形式の研修の中で新規事業創出に挑みました。Project 180は、これまで外に頼らずとも成り立っていた地域や会社が、世界がどう変わっているのかに目を向けることで自身の位置付けを認識し、地域性を紡ぎながらもイノベーションに取り組んでいく、そんな活動の土台となるプログラムです。

ディレクターからのメッセージ

Greetings from the Director

2018年にスタートした熊本イノベーションスクール Project 180も、今年で3期目となりました。この間、農業、林業、食品加工、化学、機械製造、建設、卸売、小売、情報サービス、エネルギー、企画・デザインなど幅広い分野にわたり、熊本県下32名の企業の次世代経営者・幹部候補に、また、首都圏など域外の都市圏から49名のクリエイティブな若手人材にご参加いただき、4回の集中的な週末合宿を含む約4ヶ月のプログラムを通じて、各社の未来を担う事業をチーム一丸となって構想し、具現化してきました。プログラム終了後も活動を続け、新規事業創出に結びつき、あるいは参加企業と域外人材の関係性が発展し、オープンイノベーションの土台と化してきたことは、いわゆる「研修プログラム」とは一線を画すものであり、本事業の重要な特長です。

2020年度は新型コロナウイルスの世界的感染拡大という未知の状況の中、域外人材のリモート参加を含めた従来とは異なる環境での実施を余儀なくされ、週末合宿という、プログラムを超えたチームの関係性構築の機会を失いかねない中で、オンライン・オフラインのハイブリッドでプログラムを構築し、実行していくこととなりました。幸運にも、2020年9～12月は新型コロナウイルスの国内での感染が比較的抑制されていた時期でもあり、県下企業からの参加者は原則的にオフラインで、域外からの参加者はオンライン、オフラインのいずれかで自由に参加いただきました。毎回熊本に来訪し、完全オフラインのメンバーも、全てオンラインのメンバーもいる中で、大きなハンデを生じず運営していくことは大きなチャレンジでしたが、様々なクラウドサービス、そして参加者の高いデータリテラシーを伴って、なんとか乗り切ることができたと思います。危機的な状況の中、全ての参加者の主体的な関わりを通じて、これまでと同水準、もしくはそれ以上のアウトプットに到達できたことは、コロナ禍の奇跡と言っていってもいいかもしれません。

コロナ禍は社会の痛切な痛みであり、同時に変化の契機とも言えます。困難な状況の中、新たな展望を見出すことで過去のしがらみを断ち、新たな可能性を見出し、前進する企業があることが、熊本の未来を明るく照らします。本事業・Project 180がその一角を担う取り組みであり、実際にそういった役割を推進してきたことを、未来の歴史が評価してくれるのではと願っています。

本事業は若林恵さん、山田遊さん、鈴谷瑞樹さん、山口高弘さん、4名の傑出したメンターシップなくしては実現しませんでした。以降、本プログラムレポートの端々で、メンターの影響を示す展開が示されていることが、その証左の一部です。メンター各位の献身的なご貢献に、ここで深く御礼申し上げます。



熊本イノベーションスクール
Project 180 ディレクター
株式会社リ・パブリック 共同代表
田村 大

Contents

01	Project 180とは
	About Project 180
02	ディレクターからのメッセージ
	Greetings from the Director
04	参加企業とチームメンバー
	Participating Companies and Team Members
06	メンター紹介
	About Mentors
08	南小国へ視察
	Minamioguni Study Tour
10	クマモト敬和チーム
	Herb-Presso: A Drink with Energy-Boosting Potential
12	熊本放送(RKK)チーム
	The ON & OFF-AIR Street Broadcasting Station
14	品川木材工業所チーム
	Nurturing New Lifestyles and Cultures through Boulderling Gyms
16	白鷺電気工業チーム
	Enhancing Electricity, Strengthening Community Resilience and Mind
20	PREO DESIGNチーム
	Broadening Consumer Food Experiences, Creating Opportunities for Chefs
22	ヤマチクチーム
	Designing a Local Bamboo Ecosystem for All Workers
24	利他フーズチーム
	Raising Working Womens' Self-Esteem through Healthy Meal Kits
26	レイメイ藤井チーム
	Creating a Local Research Space for Kumamoto Students
30	メンター対談
	Mentors Discussion
32	Project 180 第3期を終えて
	Messages from the Organizers

Participating Companies / Team Members



クマモト敬和チーム

Team Member

宮野 敬之 (株式会社クマモト敬和 代表取締役)
 工藤 蘭 (株式会社クマモト敬和 通販・営業部)
 大迫 光枝 (サポートメンバー)
 岡本 拓 (サポートメンバー)

[会社概要] 原料生産から加工及び販売までの一貫したサプライチェーンとハーブティー・健康茶において、全てのノウハウと業態を持ち、各事業を通じて、多種多様なサービスを提供し、持続的社会的貢献に努めている。



熊本放送(RKK)チーム

Team Member

薛 力夫 (株式会社熊本放送 テレビ編成部)
 田中 丈晴 (株式会社熊本放送 テレビ営業部)
 佐々木 周 (サポートメンバー)
 守田 篤史 (サポートメンバー)

[会社概要] 熊本県域を放送エリアとするラジオ・テレビ兼営局。1953年(昭和28年)に県内初の民間放送局として設立された。テレビはTBS系列局。従業員数は140人。



PREO DESIGNチーム

Team Member

古庄 伸吾 (PREO DESIGN合同会社 代表)
 沖田 翔吾 (サポートメンバー)
 山下 なぎさ (サポートメンバー)

[会社概要] 「食に関わる人が幸せになる社会をつくる」というビジョンを掲げる食専門のブランディングファーム。商品企画開発からコンセプトづくり、デザイン、広報・販路開拓支援などのサービスを行っている。



ヤマチクチーム

Team Member

山崎 彰悟 (株式会社ヤマチク 専務取締役)
 松原 歩 (株式会社ヤマチク 製造部/okaeri ブランドマネージャー)
 平尾 元 (サポートメンバー)
 宮岡 香苗 (サポートメンバー)

[会社概要] 熊本県南関町にて、「竹の、箸だけ」を57年間作り続ける小さなものづくり企業。大手量販店や百貨店などのOEMを手掛け、年間500万膳以上の竹の箸を世界中に届けている。2019年にリリースした初の自社ブランド「okaeri」は、国内外のアワードを受賞。



品川木材工業所チーム

Team Member

泗水 正浩 (合資会社品川木材工業所/ガンマウォール熊本 元代表)
 馬場 大喜 (合資会社品川木材工業所/ガンマウォール熊本 店長)
 江崎 舞 (サポートメンバー)
 永田 宙郷 (サポートメンバー)

[会社概要] 2017年2月に熊本県でのボルダリングの普及を目的としてジムを開業。現在はボルダリングを軸としつつも、アウトドアスポーツ中心のライフスタイル提案を目指している。



白鷺電気工業チーム

Team Member

岩山 英信 (白鷺電気工業株式会社 情報通信部)
 大越 瑛美 (サポートメンバー)
 松田 彩 (サポートメンバー)

[会社概要] 白鷺電気工業株式会社は、熊本を中心に九州の電気エネルギーの「くらしと産業の礎」をひらいてきた。「100年企業」を合い言葉に社会に信頼され続ける「幸福度No.1企業」を目指している。



利他フーズチーム

Team Member

中山 翔平 (株式会社利他フーズ 営業本部webマーケティング部)
 恩田 涼 (株式会社利他フーズ 営業本部ペット事業部)
 江藤 元彦 (サポートメンバー)
 日下 慶子 (サポートメンバー)

[会社概要] 利他フーズは、馬刺し・あか牛をメインとした九州の特産品の通信販売、馬肉を使用したプレミアムペットフードの通信販売を手がける。



レイメイ藤井チーム

Team Member

西村 慎也 (株式会社レイメイ藤井 ビジネスソリューション部)
 小坪 直文 (株式会社レイメイ藤井 ビジネスソリューション部)
 岸本 啓佑 (サポートメンバー)
 原 美希 (サポートメンバー)

[会社概要] 1890年創業。現在は洋紙の卸販売、オフィス家具・機器の卸販売、文具・事務用品の卸販売、自社ブランドの文具開発製造販売の4つの事業を展開している。知的生産をサポートする複合企業。



Kei Wakabayashi

若林 恵

黒鳥社 コンテンツ・ディレクター

編集者・ライター。早稲田大学第一文学部フランス文学科卒業後、平凡社に入社。「月刊 太陽」を担当。2000年にフリー編集者として独立し、以後、雑誌、書籍、展覧会の図録などの編集を多数手がける。音楽ジャーナリストとしても活動。2012年に「WIRED」日本版編集長に就任、2017年退任。blkswn publishers (黒鳥社) を立ち上げ、コンテンツ・ディレクターとして活動。音楽・文化芸術から最新テクノロジーまで、幅広いテーマについて巨視的な視座で常に本質的な問いを投げかけ続けている。著書に『さよなら未来-エディターズ・クロニクル 2010-2017』(岩波書店)。近著に「NEXT GENERATION BANK 次世代銀行は世界をこう変える (blkswn paper vol.1)」『NEXT GENERATION GOVERNMENT 次世代ガバメント 小さくて大きい政府のつくり方』。

Yu Yamada

山田 遊

method inc. 代表取締役

東京・南青山のIDÉE SHOPのバイヤーを経て、2007年、method(メソッド)を設立。工場見学を軸に据えたイベントとして国際的にも知られる「燕三条 工場の祭典」の全体監修も務める。グッドデザイン賞審査委員など各種コンペティションの審査員や、教育機関や産地での講演など、多岐にわたり活躍中。モノが生まれる現場から、商品開発、ブランディング、そして店舗の運営やディスプレイまで、ものづくりの全行程を知る視野の広さと精細な分析眼を踏まえたクリエイティブな提案を数多く実現している。著書に「デザインとセンスで売れるショップ成功のメソッド」など。



Mizuki Suzutani

鈴谷 瑞樹

エンジニアカフェ福岡 コミュニティマネージャー / 博多図工室

2012年12月 福岡県福岡市に「博多図工室」を設立。ハードなものづくり(製造)からソフトなものづくり(IT)まで、幅広い知識と経験をもとに、ベンチャー企業の製品開発や、アーティストの作品制作支援を行う。3Dプリンタ、レーザーカッター、CNCミリングマシンなどのデジタル工作機器のアドバイスも多く行う。2017年、熊本県阿蘇郡南小国町にて「ファボラボ阿蘇南小国」の立ち上げにかかわる。2019年より福岡市で地元エンジニアコミュニティの支援を行う。各地の地域性に根差した製品開発を地元の人が主体となって継続できる体制構築への協力を行っている。

Takahiro Yamaguchi

山口 高弘

GOB Incubation Partners 代表

社会課題解決とビジネス成立を両立させることに挑戦する事業支援を中心に、これまで延べ100の起業・事業開発を支援。社会に対する問い・志を、ビジネスを通じて広く持続的に届けることに挑戦する挑戦者を支援するためにGOBを創業。自身も起業家・事業売却経験者であり、経験を体系化して広く支援に当たっている。前職・野村総合研究所ではビジネスイノベーション室長として大手金融機関とのコラボレーションによる事業創造プログラムであるCreateUを展開するなど、個社に閉じないオープンな事業創造のための仕組み構築に携わる。内閣府「若者雇用戦略推進協議会」委員、産業革新機構「イノベーションデザインラボ」委員。主な著書：「いちばんやさしいビジネスモデルの教本」(インプレス)、アイデアメーカー(東洋経済新報社)



Minamioguni Study Trip

南小国へ視察 >>> Minamioguni Study Trip

第2回目の集合研修では、南小国町の「ファブラボ阿蘇」とそのファブラボに併設する「穴井木材工場」へ視察に伺いました。穴井木材工場の3代目、穴井俊輔氏に小国杉の工場と穴井氏が立ち上げたインテリア・ライフスタイルブランド「foreque」の家具や新商品をご案内いただき、その後3期生は小国杉を使ったグライダー作りワークショップに参加しました。地元の特産品である小国杉を活用し、国内外に向けてあらゆるプロジェクトや事業展開に挑戦し続ける穴井氏の取り組みは、新事業案への刺激と参考になったようです。

Herb-Presso: A Drink with Energy-Boosting Potential

内なる力を引き出すためのエンパワーメントドリンク「ハーブプレッソ」の可能性

南阿蘇でハーブ栽培から加工までを手がける企業が

健康に関心を寄せる人々が増える時代の中で、新たなハーブ市場を開拓する

クマモト敬和チーム

- Team Member 宮野 敬之 (株式会社クマモト敬和 代表取締役)
- 工藤 蘭 (株式会社クマモト敬和 通販・営業部)
- 大迫 光枝 (サポートメンバー)
- 岡本 拓 (サポートメンバー)

Q. 事業アイデアに行き着くまでの経緯を教えてください。葛藤などありましたか？

工藤：当初は新商品開発を行う予定ではなかったのですが、チームメンバーやメンターの方々と話をしていく中で、違う視点で見えていかないと気づかされました。ターゲットを絞っていく中で、今までとは異なる顧客がいることが発見できましたが、本当にそこにアプローチできるのかという不安がとてもありました。ただ、メンターの山田さんに正解なんてないよというコメントをいただき、気持ちが救われた気がします。また、サポートメンバーのお二人から率直で的確な意見をいただけたので、この提案に至ることができたと思います。

Q. 今回プログラムの中でチームで考えられた、キャッチーなネーミング、「ハーブプレッソ」はどのようなものでしょうか？

宮野：「ハーブプレッソ」は、メディカルハーブセラピストが調合したブレンドハーブを、スチームで素早くプレスする事により、ハーブ由来の旨味と薬効のみを高濃度抽出させた今までに無い飲み物です。これからの時代・環境に必要とされる「エンパワーメント」や「マインドフルネス」に照準を定め、心の緩和や人生の豊かさを感じ取っていただければと思っています。ただ社内の商品企画課の社員に「ハーブプレッソ」の商品化について話しても、いまいちピンとこないというか、それって美味しいの？パッケージはかわいいの？

と、これまでの常識に当てはめてしまう傾向があることがわかったんです。洗練された美味しいハーブティーとは一線を画す「ハーブプレッソ」なるものをなぜ商品化するのかと。自分もそうでしたが、これまで「実績で売れるもの」に集中



し見極めてきたため、新しい挑戦ができなくなってしまっていたと、今回Project 180に参加して改めて感じました。これまで売れてきたんだと言う自負を無くして、無難ではない新たな商品を作りたいと思うようになりました。

Q. 商品化に向けて動き出しそうですね？

今年の4月に熊本駅前に新店舗を出店するのですが、そこで「ハーブプレッソ」を紹介・販売することをこのプロジェクトの最終目標としています。研修内でコンセプトは出来上がりましたし、周りの人達も飲んでみたいと言ってくれています。これから実際にどのような商品にするかに集中して行きたいと思っています。

Q. クマモト敬和チームの皆さんはお互いニックネームで呼び合うほど、とても仲が良く、雰囲気が良かったと思っていますが、いかがでしたか？

宮野：同じ目線に立ち、一緒に事業案を考えてくれるサポートメンバーの大迫さんや岡本さんと共にプロジェクトができたことは、



今回の研修で得た一番大きなものだと思います。プログラムのはじめにメンターの方々より厳しいコメントをいただき、はっとしましたが、そのおかげでチームに全体に火が付き、本気で自分たちのアイデアに向き合えた気がします。

岡本：同じチームの大迫さんがクリエイティブで感性がとて面白く、お互いのバックグラウンド(デザイン)が似ていることもあり、話がすごく盛り上がりました。サポートメンバーとして役割は、大迫さんが発想を広げる人で、自分は交通整理をする人といった分担ができていたと思います。

Q. プロジェクト全体で印象に残ったことや、発見などがあれば教えてください。

大迫：今回のプロジェクトがはじめて熊本に行く機会となったのですが、熊本は水も綺麗で、米や野菜などの食材も豊富で、とにかく食べ物美味しく、足りていないものがない。だからこそこの地域だけで経済が回りやってくれたんだらうなと感じました。ただ熊本大震災や数年前の水害の災害を通じて地域内だけでなく、外の世界とも積極的に繋がっていかないといけないという状況に直面したんだと思います。地域のアイデンティティも大事にしつつも外も受け入れることが大事になっていく、そうした変化の中でのProject 180なんだなと思っています。

宮野：メンターの山田遊さんに、新しい事業を考える時は直感じゃないですか、と言われたことが印象に残っています。論理的に物事を考えている方だと思っていましたが、直感の後に論理というように、自分の直感を大事にしていんだと思いました。研修の中で多くの方々からご意見を頂くことによって、現実突き当たったり、希望が見えてきたりと、大変濃い期間を過ごせたと思っています。我が社でも、今後事業はプロジェクト中心で考えていきたいと思っていますが、このProject 180の一番の肝でもある、プロデューサーとファシリテーターと言う役割が重要だと感じました。社内でもその役割を生かしていくことが今後の課題だと思っています。

岡本：これまで担当してきた自分の勤める会社での仕事と異なり、企業の社長と直接話しながら新しい事業を作っていくと言った過程がとて新鮮でした。そして今回のプログラム内で訪れたファブラボ南阿蘇さんや参加企業のヤマチクさんの竹の木工所で、実際のものづくりの一次情報に触れることができ、そこから得た実感値の高さが今回の熊本でのプロジェクトに大きな意味をもたらしていたように思います。

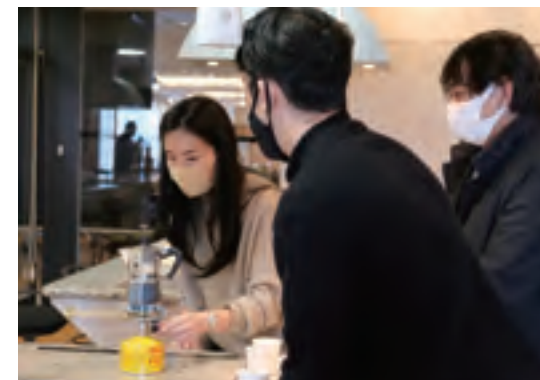
Q. Project 180のどんな点がよかったですか？

工藤：私自身の仕事の仕方や考え方が変わりました。Project 180の研修の中で、改めて深く考え悩むと言う時間が大切だと言



うことに気づき、社内のチームメンバーに自分の意見を纏め積極的に自分の考えを出して貰うなどして、これまでとは違う視点を持ち、プロジェクトにチャレンジすることが出来るようになったと思います。小さな箱の中だけで考えても偏ったことしかできないので、外の広いところからの視点を持って取り組むことの大切さをとても感じました。

宮野：Project 180のような研修は今後も続けられていった方が良いと思います。熊本は恵まれ、何にも頼らずに生活が出来てきた場所でしたので、実際自分もこれまで人に教えて貰わなくても良いと思っていました。ただ災害やコロナなど、変化の多い時代の中で私たちは戦わなければならなくなり、ただ良いものを作るだけではなく、どう活かしていくかを考えなければいけない世の中になってきていると思います。実はプログラムに参加する前は、少し抵抗があったのですが、実際全く違う畑の方々やチームを組み、今までにない刺激を受け、熊本の未来と会社の可能性と感じました。外部からの視野を受け入れるきっかけとなる研修であると思いますので、ぜひ今後も熊本の多くの方々に参加して頂けたらと思っています。



The ON & OFF-AIR Street Broadcasting Station

ON AIRとOFF AIRを組み合わせた屋台放送局

地域課題の解決と地域コミュニティの
広がりを目指した地域活動インキュベーション

熊本放送(RKK)チーム

- Team Member
- 薛 力夫 (株式会社熊本放送 テレビ編成部)
 - 田中 丈晴 (株式会社熊本放送 テレビ営業部)
 - 佐々木 周 (サポートメンバー)
 - 守田 篤史 (サポートメンバー)



Q. 今回の研修でRKKチームのみなさんで作り上げた事業アイデアはどのようなものでしたか?メディアの変化が迫られる時代の中で地域に根ざす放送局が地元はどう関わっていくか、といった難しいテーマだったのではと思います。

薛: 放送が、地上波から通信へとシフトしていく中で、熊本放送が地域で、いかに存在感を示していけるのか?地域情報のハブ機能を保ち、地域や人の情報をRKKに集積して活用できるか?そして、私たちの情報力によって地域活性化に寄与できるか?ここが私たちの課題でした。そこで皆さんのアドバイスと協力を得て考え出したのが「屋台放送局」です。各地を転々としながら公開型で月1回程度の放送を行っていきます。特徴的なこととして、放送局は通常オンエアーを大事にしますが、今回はオンエアーが終わった後のオフエアーに着目しました。会場に集まった皆さんが抱える地域の課題にも耳を傾け、他の地域から地域の課題に果敢に取り組んでいる人たちを招いて解決の糸口となるようなヒントを見出したり、地域課題を解決するクラウドファンディングに挑戦したり、県内の地域コミュニケーションの広がりを作っていくという試みです。最終プレゼンの後に、メンターの皆様より「機動的にネット対応するほうが時代にあっていけるのでは」というアドバイスもいただいたので、屋台式のラジオ放送よりも、放送を前提としないYouTubeライブ中継車で各地を巡るというアイデアも現在検討中です。

田中: 我々の情報集積の力や発信力という強みを考えたときに、

熊本県全域を網羅するオンラインサロンのような形で、地域活動インキュベーションの土台となって持続的な発展を支えることができると思い、今回の提案となりました。今回のプログラムやアイデア出しに満足している一方で、この難しい問いに対してせっかくの機会でしたので、放送業の範囲を飛び越えた新規事業にチャレンジすることも必要だったのではないかと考えています。

佐々木: 私自身、放送業界というこれまで馴染みの薄かった産業への関わりで、当初は悩ましいと思っていたのですが、知れば知るほど、変革の真っ只中にある産業で、非常に面白い世界にいると密かに盛り上がっていました。



Q. チームの雰囲気すごくよかったように見えたんですが
守田: 同じサポートメンバーの佐々木さんには、分散型社会に対



してソフトから関わって行かれている経験や考えをお持ちだったので、興味津々で、ずっと質問責めをしていました。佐々木さんが代表をされているjuwi自然電力オペレーションさんとRKKさんが、今回をきっかけに共同でプロジェクトを進めることに可能性を感じていますので、僕もデザインや出来ることでお手伝いしたいと思っています。そして、何よりみなさんにご飯を食べながら話せた時間が楽しすぎました。やっぱり「人」というか、RKKの薛さん、田中さん、佐々木さんに出逢えたこと一番よかったと思っています。

佐々木: 守田さんのキャラクターや、デザイナーとしての感性の高さ、アイデアの出し方など、非常に刺激的でした。今回の提案も、守田さんのアイデアをベースに組み立てて行ったと思います。こういった右脳の思考は僕自身不得意な部分でもあるので、やっぱり事業家とアーティストのような組み合わせはいいなと思っています。

Q. 今回のプログラム全体を振り返ってみていかがでしたか?今後も一緒に取り組みを継続できそうですか?

守田: 放送という分野に関わるのが僕自身も初めてで、初めは不安でしたが、関わるにつれ日に日にワクワクしながら参加していました。RKKさんが熊本の地域に根ざしたメディアだったおかげで、地域全体を俯瞰して見られたことがよかったと思っています。私は地域に関わる仕事もやっていますが、地域性の魅力やまたは物語を文脈を整えて打ち出すことに限界を感じています。首都圏集中だったものが分散してきているという流れがあって、そんな中でそれぞれの地域が同じような課題を抱えている状況にあります。だからこそ、これまでの地域ブランディングのフォーマットではなく、地域に根付く会社の力を活かす、会社を通して地域・熊本を見る、

そういったことが今回できたと思っています。

佐々木: 議論して、アイデアを出して、プレゼンをして、気持ちよく満足して終了と言ったわけではなく、プログラムの出口をきちんと目指していったことがよかったと思っています。また個人的には、RKKさんが脱炭素やSDGsの取組みを推進し、地方局の先進事例となってくれたらいいなと思ってます。電力の自由化のように、あらゆるものが自律分散的に地域で民主化していく、これはエネルギーでもメディアでも近い感じがするので、今後のRKKさんとのコラボレーションの可能性を感じています。今回の取組みが実働する事を願っていますし、立ち上げの部分まで引き続き一緒にできればと思っています。

田中: Project 180のプログラムに参加して、新規事業を立ち上げようとする他の参加企業の真剣さを目の当たりに出来たことと、自社の現状を改めて把握できたことが良かったと思います。サポートメンバーのような、外の世界の方々と交えた内省から新規事業を考える有機的なマッチングでした。今後も引き続きRKKが地元熊本でどう生き残って行くか全力で考えていきたいと思っています。



Nurturing New Lifestyles and Cultures through Bouldering Gyms

ボルダリングジムを中心にライフスタイルカルチャーを育む

クライミングジム施設とコンサルティング事業を手がける品川木材工業所
ボルダリングをカルチャーとして確立していくために、分野横断の可能性を探る

品川木材工業所チーム

- Team Member
- 泗水 正浩 (合資会社品川木材工業所 / ガンマウォール熊本 元代表)
 - 馬場 大喜 (合資会社品川木材工業所 / ガンマウォール熊本 店長)
 - 江崎 舞 (サポートメンバー)
 - 永田 宙郷 (サポートメンバー)

Q. 馬場さんは、今回の参加者の中で最年少(23歳)でしたが、参加してみていかがでしたか?

馬場: これまでジムトレーナーとして働いていたので、Project 180のような事業作りの研修に参加すること自体が初めてでした。他の業種の方々と交流や経営者の方々と話す機会を得て、ジム以外の世界を意識できるようになったと思います。はじめは、参加者やメンターの方々の間で飛び交う言葉自体についていくことすら、難しかったのですが、1つずつ調べたり、仲間に助けを求めたりして、プロジェクトを乗り切っていました。

江崎: 馬場さんのボルダリングに対する愛や、このプロジェクトを通じての伸びっぷりをすごく感じました。終盤にはすごく堂々と落ち着いたプレゼンをしていて素晴らしいです。

馬場: 本当にサポートメンバーのお二人にはすごく助けられました。永田さんは、いつも斬新なアイデアをくださり、江崎さんはそのアイデアを順序立て、組み立てながら自分たちを支えてくれたので、いろいろなアイデアに挑戦できたと思います。

泗水: 私は現在品川木材工業所の会社は離れ、今回プロジェクトにはプライベートで参加したのですが、馬場君にとって今後の会社でのリーダーとして活躍するための良い研修と成長の場になったと思っています。



Q. プロジェクトでどんなことが印象に残っていますか?

江崎: 経営側が主体となって、事業案のトライアルをすぐに実施されたのが印象的でした。私の会社の場合、トライアルを実施するまでに数年かかることが普通ですが、今回のケースでは、研修で出たアイデアを翌週には実践し、当日は「じゃあそれからどうしようか」というようにスピード感を持ってこのプロジェクトが進められました。そして、そのアイデアがどれくらい現実的か、熊本で受け入れられるか、どこに障壁があるかに対し、すぐにフィードバックがあり、私自身もすごく勉強になりました。すぐに試してみる姿勢は、会社単位では難しいかもしれませんが、自分が主体となる仕事や、私生活の中に取り入れていきたいと思っています。

泗水: チームの事業目的、価値等をサポートメンバーやメンターの方々と議論して深めた時間が有意義でした。県外サポートメンバーの永田さんの商品開発コンセプトづくり、江崎さんからいただいた女性消費者としての目線やアドバイスや、メンターの山口さんの実践的な講義は非常に参考になりました。そのような本やWEB等から得ることのできないインプットは、我々熊本県の中小企業にとってはとても貴重なものだったと思います。

Q. 今後はどのように展開されていく予定でしょうか?

馬場: コロナの状況が続いていますので、企画していたリトリート



ツアーの実施は一旦ストップします。ただジム内でできるイベント等の計画は継続していて、音楽イベントや、これからUターンで熊本に戻ってくる人気トレーナーの方々と一緒に、ヨガスタジオやパーソナルトレーニングができる場所をつくる予定です。ヨガやフィットネスのトレーナーは個人事業主がほとんどで、単価が安く、ビジネスとして継続することが難しいため、お金と運営とがバランスして、きちんとトレーナーにお金が回るシステムが作れると良いと思っています。それから、会社からの推奨で動画制作の学校にも通っているのですが、ジムのYouTube動画を作成・配信し、いろんな分野の仲間とコラボしながらボルダリングカルチャーを広めていきたいと思っています。

Q. サポーターのお二人にとって、このプロジェクトはどんなところに意義があると思いますか?

江崎: 私は熊本出身で、Project 180に参加するのは2回目ですが、熊本県企業の次世代リーダーと、県外サポートメンバーがフラットな関係で取り組めることが良いと思っています。今回はコロナの影響もあって、全てオンラインで研修に参加しましたが、プロジェクト終了後もチームを超えて相談し合えるようになると思っています。いつか皆さんに直接お会いしたいと思っています。個性はバラバラですが、根本的な価値観はどこか似ている所があるのかなと思っています。

永田: Project 180では、新しい事を考えなければならぬと、難易度の高いウォールに挑もうとした品川木材工業にとって、実は自分たちの事業のコアな魅力とは何かという原点まで引き戻して

くれる場だった感じがします。僕自身にとっては自分の中にある常識をそと揺り動かしてくれる機会であり、チームにとっては、いつもの自分なりに培ったルールや設定ではない動き方をすることで、変化や成長することができたのではないかと思います。こう感じられるのも、ボルダリングだと、しっかりアンカーが打たれザイルが結ばれていると例えるべきか、この近くもなく遠くもないが、頼りあえる心の距離感を保てるように入念に準備されたプログラムと、ざっばらんに意見をくれたメンターの存在があってこそだと思っています。こういう信頼のもとで足元から身が着着せる(磨きなおせる)場はありそうで意外とないため、楽しくありがたい出会いと学びの機会でした。品川木材工業とはそれこそ物理的にも近くも遠くもない距離にいますので、またこのコロナ禍が収まった暁には、皆さんの顔を見に行きたいと思っています。



Shirasagi Denki Kogyo Enhancing Electricity, Strengthening Community Resilience and Mind

電気と心のレジリエンスを育む

人々の暮らしを支えるインフラを守る仕事に誇りを持ちながら、遭遇した災害
この困難を地域とともに乗り越えていく礎となるような企業としての新たな挑戦

白鷺電気工業チーム

Team Member
岩山 英信（白鷺電気工業株式会社 情報通信部）
大越 瑛美（サポートメンバー）
松田 彩（サポートメンバー）

Q. サポートメンバーの大越さんから見て、白鷺電気工業さんはどんな企業でしたか？

大越：研修の1日目に企業訪問がありましたが、社長の沼田さんのお話からも白鷺電気工業さんは本当に素晴らしい企業だなと感じましたし、岩山さんから社内のお話を聞けば聞くほどその認識は強くなりました。地方の中小企業って一般的に何かしら課題を抱えているのかなと勝手に思いこんでいたのですが、全くそんなことなかったんです。意思決定の基準がはっきりしている、目指すビジョンとリソースが明確にあるなど、私にとっては新鮮な発見が多く、新規事業に取り組むに当たって最適な組織形態なのではないかと思いました。

Q. 心のレジリエンスに焦点を当てた今回の事業計画は、実践に向かって動いていきそうですか？

岩山：研修後、更に内容をブラッシュアップさせ社長に発表したいと考えています。コロナウイルス感染拡大の状況下ではありません



が、できることを進めて行こうとチームメンバーとはターゲットとなる顧客像の絞り込みや具体的な実現ステップについて検討を進めています。また、今回のテーマである「心のレジリエンス」は熊本地震や豪雨災害等の被災地であることを抜きには語れないので、社会実験的なプロジェクトとして県や市などの行政と一緒に取り組むことも視野に入れています。最初から大きな取組としてスタートするのは経験としても厳しいと思うので、小さな一歩を踏み出すための準備予算と期間をうまく組み立て、熊本で活躍され知見のあるProject 180企画運営やメンターの方々のアドバイスやお力添えをいただきながら、実証的な企画づくりからスタートしたいと考えています。

Q. 岩山さんは、いろんな方々を巻き込みながらうまくプロジェクトを進めていったように思います。

岩山：そうですね、気付いたらたくさんのサポート体制が出来上がり、本当に感謝しています。Project 180に参加していない自社のメンバーにも協力・応援してもらいました。サポートメンバーの

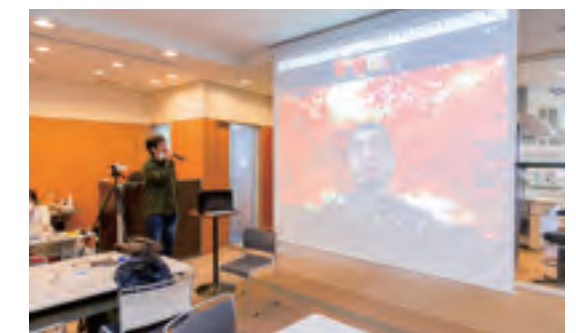


大越さんや松田さんをはじめ、別のチームのサポートメンバーの日下さん（産業医）、それから研修中にインタビューさせていただいた京都大学の先生にも協力を仰いでいる状況です。

日下：心のレジリエンスという点で、自分の専門とする医療の分野でもあったため、何か協力できることがあればとお声かけさせていただきました。自分だけでは答えきれない質問や内容に関しては、専門の方や建築関係の人の知り合いをチームに紹介し、夜な夜な一緒にZoom会議などで打ち合わせをさせていただきました。

Q. 研修全体を振り返ってみて、いかがでしたか？

岩山：さまざまな業種や専門知識をお持ちの方との出会いがあり、こんな機会がないと絶対に出会わないばかりで本当に刺激的でした。素晴らしいプログラムでした。自分も含めて熊本県民は県内で自分たちでどうにかしようという考えを持っている傾向があるのですが、今回Project 180に参加させていただいて、このままでいけないと改めて感じ、その殻を破る大きなキッカケになったと思います。研修終了後も引き続きチームメンバーと事業案の実現に向けて計画を進め、この事業を成功させたいと思っています。



成果報告会



Broadening Consumer Food Experiences, Creating Opportunities for Chefs

新しい食の体験×料理人の機会創出

食の体験の質を求める生活者と、働く場所と機会が失われる料理人、その両者を救う

PREO DESIGNチーム

- Team Member
- 古庄 伸吾 (PREO DESIGN 合同会社 代表)
 - 沖田 翔吾 (サポートメンバー)
 - 山下 なぎさ (サポートメンバー)

Q. 今回のProject 180の意義はどのようなところにありましたか？

古庄：やはりメンターのご意見が非常にありがたかったです。起業はどこでもできますが、地方にいて一番機会損失なことは、こういった最前線の方々と話したり意見を頂いたりする機会だと思っています。起業時のメンタリングは圧倒的な経験があるトップレベルの方でないという意味がないと思っているので、今回うちに限らず、他の熊本参加企業に対しての金言の数々は厳しくも的確で、さすがだなと思うものばかりでした。それにいつも会社の事業案は1人で考えて決めてきたので、サポートメンバーのお2人と議論できたのはとても良い機会だったと思います。沖田さんはとても賢く、素早く考えを理解し意見をまとめるのに長けている方で、山下さんは人脈やネットワークの広い方を持っておられ、今回のテーマでもある食に対する知識もお持ちだったので、多くのアドバイスをいただきました。

Q. サポートメンバーのお2人の故郷も熊本と伺っていますが、参加の決め手は何だったのでしょうか？



沖田：私は熊本県の八代市出身なのですが、将来熊本に戻り仕事がしたいという想いがありました。地元・熊本を好きな仲間は多いのですが、地域経済や企業の事業創造という観点で「地方だから」という後ろ向きな理由でイキイキと新しい事業を生み出そうといった方にこれまであまり出会っていませんでした。だからこそ熊本に熱い想いを持った素晴らしい方々と共に新しい事業創造に当事者として関わりたい機会だと思い、今回Project 180に参加しました。

山下：私の故郷も同じく熊本です。地元が熊本地震や水害などの被害を受け、今までは災害・復興ボランティア活動に従事していたのですが、新型コロナウイルス影響で、県外からボランティアに通うのが難しくなりました。そんな時にProject 180のを知り、コロナ禍でも熊本に引き続き貢献できる取り組みだと思い、参加を決意しました。熊本県出身者として、熊本おもしろいぞ!と、そして熊本から一度離れたものから映る熊本の地域資源や技術、そして今後どのような可能性があるのかを客観的に探る良い機会になるなと思いました。

Q. 将来的に熊本で働くことを見据えたお2人にとって、実際に研修に参加してみていかがでしたか？

沖田：普段あまり関わらないような方々と接し、業務外のプロジェクトを形作ることに面白さを感じました。前職はコンサルタントの仕

事をしていたのですが、金銭の授受が発生するものになると、短期的なコストを求めて固定観念を超えたアイデアは生まれにくいのではと思っています。自分が所属する業界のことだけを思慮し「井の中の蛙」にならないといった点でも、非常に良い経験となりました。そして何よりもこの活動でできたつながりを大切にしたいと思います。地元熊本で、次代を担う同世代の人たちに多く出会えたことが何よりもよかったと思っています。将来的には熊本に戻りたいと考えています。

山下：私は普段鍼灸師をしているのですが、これ一本ではなく、幅を広げていきたいと思っています。今回参加された他の企業、クマモト敬和さんの阿蘇のハーブティーはこれまで自分の講座で振舞っていたり、仕事の領域として共通点があったので、将来何かしらコラボとかができたらいいねと話しています。熊本は阿蘇だけでなく、上益城や美里町といった別の地域にもまだまだ知られていない多くの資源が眠っていると思っています。私は熊本県の天草に

移住したいという思いがあり、土地の豊かな農産物や魚など美味しい素材を使い、健康的な生活を送れるような場を作りたいというビジョンを持っています。今回チームで一緒だったPREO DESIGNさんをはじめ、他の参加者とのネットワークも通じて、そのビジョンの実現にむかって動き出したいと思っています。



Designing a Local Bamboo Ecosystem for All Workers

竹に関わる全ての人たちのための生態系とプラットフォームづくり

竹の、箸だけと竹のお箸だけを作ってきた株式会社ヤマチク

竹と竹に携わる人と地域の可能性を広げる“take lab”の展開に挑戦していく

ヤマチクチーム



- 山崎 彰悟 (株式会社ヤマチク 専務取締役)
- 松原 歩 (株式会社ヤマチク 製造部 /okaeri ブランドマネージャー)
- 平尾 元 (サポートメンバー)
- 宮岡 香苗 (サポートメンバー)

をすることで原材料価格をあげることはできたのですが、それにもやはり限界があります。切り子さん、竹材屋や山主といった竹の仕事に関わる全ての方々が今後も仕事を続けていくためには、自分たちの力でビジネスとして回す生態系が必要だと考え、“take lab”のアイデアに至りました。

Q. 今回の新事業案で生まれた“take lab”とはどんなものですか？

松原：“take lab”は南関町で放置されている竹を資源にしていくために、竹に関する知識の共有や竹林の活用法や技術などを実験しながら蓄積していくラボ(研究の場)です。「竹に関することなら“take lab”に訊け」と言われるような竹のプラットフォームのような場所を想定しています。これまで弊社は、竹箸をブランディング

Q. 松原さんの「自分の竹林にある“筍”をメルカリで売ってみた」というエピソードが印象的でした。

松原：既に持つ範囲や資源の中で、自分だけの力で稼ぐことができないか?という身の丈にあった挑戦をしてみました。竹に関わる人たちが、新しいことに対して「できない、わからない」という言葉で片付けてしまわず、まずは自分自身ができることを始めることで、活動を広げられるといいなと思いました。



Q. 今後具体的にはどんなことに取り組んでいかれるのでしょうか？

山崎：すでに“take lab”の年間活動スケジュールはできていて、50m飛ぶスーパー竹とんぼの体験イベントや、筍を生えたまま焼く大地焼き(美味しんぼでも登場)など、定期的なイベントを行って、南関町を竹の街としてブランド化していく予定です。こうした竹関連の催事をやっていく一方で、ラボとして竹家具の開発や、サポートメンバーの平尾さんの出身校の高専などと連携した大型のCNCルーターやショップボットなどのデジタル技術を利用した実験的な取り組み、そして竹の建造物製作なども視野には入れています。ですが、あくまで皆が取り組めるような再現性を担保するために、技術的な面を高度にしすぎないことが大事だと思っています。やはり私たちは「広くではなく、根付けるか」だと思っています。南関町って、竹林面積だと全国2位なんですけど、やっぱりブランド力がなくて。最近、そのブランド力推進のために、県の林業振興課が竹の補助金をアップデートしたので、take labを中心に位置づけながら、行政などと連携、共同で竹のまちづくりや産業振興に取り組んでいきたいなと思っています。ヤマチクとは今後、分社化を前提に事業を組み立てていくつもりです。

Q. 実際に動き出すプロジェクトにすぐに繋がれた理由は何かだと思いますか？

宮岡：山崎さんが会社の意思決定者で、即行動されたからじゃないでしょうか。企業で展開する事業案は基本、大きな話になりがちで、実現までに時間がかかり、多くの関係者を巻き込まなければならぬ状況になるのではと思うのですが、今すぐスタートできる、かつ将来的に拡大可能性のある事業案に落とし込めたこともその理由だと思います。

Q. 全体のこのプログラムを振り返ってみていかがでしたか？

山崎：本業から離れてこのプログラムに取り組めて良かったと思っています。経営者と社員が一緒に参加することで、これまでの会社のトップダウンを崩すことができる良い場になったとも思います。研修中はどれだけ自分が専務取締役としての存在を消せるかということを考えていました。これまで社外の方から会社の評価をもらうことがなかったですし、松原の能力向上と自信につながる良い機会でもあったと思います。

松原：いつもは工場で箸を作るだけの日々だったので、全く新鮮で楽しく学びの深いプログラムでした。今後新しいプロジェクトに挑戦する時は、まず自分がやってみたいと思うか、顧客がそれを望んでいるかどうか、類似するサービスはないか、などという点を踏まえてチャレンジしていきたいと思っています。

宮岡：ヤマチクチームで事業案を考える中で、生産のトレーサビリティや竹林の課題などについて学ぶことができ、とても勉強になりました。私個人の変化としては、中小企業の状況に触れたりする中で、自分の会社の社会的な位置づけを意識するようになったと思っています。今後も、“take lab”のメンバーとしてプロジェクトに関わっていきたくて、私の本業の建築と“竹”は大いに関連があるので、会社としても関われないか検討したいと思っています。

平尾：今回のプロジェクトに参加して、竹は宇宙外生命体なんだと気づかされました(笑)。竹の可能性は無限ですね。私個人のミッションとしては、10代の声をもっと社会に届くといいなと思っています。今後実際にヤマチクさんや“take lab”と連携していく予定の私の出身の高専の先生方や学生たちと一緒に場作りと活動をしていきたいと思っています。偶然なことにヤマチクさんから私の出身校まで車で15分で行けるんです。そうしたご縁もありますし、今後この事業と一緒にどう成り立たせていくか、すごく楽しみです。



Raising Working Womens' Self-Esteem through Healthy Meal Kits

働く若手女性の自己肯定感を「食」で救う

理想と現実のギャップに悩み働く女性を支える新たなプロダクト開発へ

利他フーズチーム



中山 翔平 (株式会社利他フーズ 営業本部 web マーケティング部)
 恩田 涼 (株式会社利他フーズ 営業本部 ペット事業部)
 江藤 元彦 (サポートメンバー)
 日下 慶子 (サポートメンバー)

Q. Project 180には、どんなきっかけで参加を決められたのでしょうか?

中山：昨年度の2期に弊社代表の猪本が参加し、Project 180の話は聞いていて、今年度は社内で参加が募られたので手を上げ恩田と2人で参加させていただきました。熊本他企業や大都市圏で働くサポートメンバーの方々の議論を交え「自社の強み」を改めて考える機会になると、他企業の方々の考え方・仕事の進め方などを吸収したいと思っていました。それに新型コロナウイルスのような不測な事態が起きた場合でも「揺るがない会社」を作っていくという面でも、Project 180で多くのことを学びたいという思いがありました。

江藤：自分の経験値を高めたかったというところが一番の大きな理由です。日本の社会全体を見ると、やはり地域と都市の関係性や地方創生、関係人口の創出などのテーマが常に頭に浮かぶのですが、まだその具体的な望ましい姿や解決策は描けておらず、そこに繋がる経験ができればと思っていました。勤めている会社の仕事では、地方創生は分断されたものになっていますが、このままの市場ではやせ細っていくだけで、新たな関係性というものを創出していくことが、今後社会的な存在意義に繋がると考えています。



日下：私は本業では産業医をしていますが、数年前にデザインスクールでストラテジックデザインの勉強をしており、学んだことを実践できる機会を探していました。自分の専門性を生かして、Well-beingの視点を取り入れたプロジェクトづくりに貢献したいという想いと、普段の仕事を通しては出会えない分野の方と出会えるのが魅力だと感じ、参加を希望しました。新型コロナウイルスの影響で、働き方も暮らし方も今までにないスピードで変化しているのを感じています。働き方改革やオルタナティブなワークフォースの活用というのは、リソースに恵まれた大企業や都市部での話と思われがちですが、小規模の組織だからこそできることも多いと思っています。

Q. 今回の新商品のアイデアに至るまでの経緯はどんなものだったのでしょうか?

恩田：最終発表会の案に行き着くまで、二転三転ありました。アイデアを自分事化し考え、利他フーズの強みである「食」をどのように新事業案に展開していくか悩みましたが、働く若手女性の自己肯定感を高めるための商品開発をしたいという考えに行きつき、同じ20代女性の同僚にインタビューするなどし、顧客像を明確にしながら、マーケット分析などを繰り返し、新商品の提案に至りました。ただ最終発表の日に、メンターの方々より「自己肯定感ってそもそもなんだろう」と問いをいただき、改めて考える機会を得ましたので、その後も引き続きプロダクトの見直しを行っています。



Q. 提案までのプロセスの中で、何か苦労した点や難しかった点などはありますか?

中山：オンラインと現地でのハイブリッドでのプロジェクトの進め方が少し難しかったかなと思っています。現地熊本にいるメンバーで議論を進めると、どうしてもオンラインのメンバーが入りづらくなる場面があったので、その辺りをもう少しうまくこなせるとよかったですかなと思います。

日下：私は今回オンラインのみの参加でしたので、現地に一度も伺えなかったのが残念でした。直接お会いして試作品などを作りながら、直接プロジェクトに取り組めたら、もっと有意義なプロジェクトになっていたかもしれません。コロナが落ち着いたら熊本に伺いたいと思っています。

Q. 一方で、全体を振り返ってみて、印象に残ったことや、学びなどはありますか?

中山：メンターの山口さんのワークは、これまで考えていた事業の欠陥や改善点が浮き彫りになり、とても面白かったです。また毎回メンターの方々によるご意見も新たな視点から物事を考えることができ、刺激になりました。その中でも「熊本で利他フーズがやる意味」というメンターの山田さんの指摘が、アイデアの方向性を決める上で、最も大きかったと思います。普段、社内か同じ分野の社外の方としか仕事をしない自分にとって、まったく違うジャンルや東京で働く大手企業のサポートメンバーの仕事の進め方など伺うことができ、大変参考になりました。自分の中に知識としてなかった「新規事業の進め方」というものを今回のプロジェクトで初めて学ぶことができました。

江藤：他社のプロジェクトに入り込み一緒に考えるといった経験が面白く、とても勉強になりました。チームメンバーには普段自分



の会社でどんな観点や順番で事業を考え構築していくかということ共有できましたし、お互い違う価値観や知識を持って意見を出し合うという、意味のある活動ができる場になったと思いました。お金の発生しない関係だからいいのかもしれませんが。集合研修③でのメンター山口さんの講座を含め、メンターの方々の考え方や、他の参加企業の考え方を聞いたこと、熊本で友人の輪が広がったことに関しては大変ありがたく思っています。自分のこれまでの知識経験を会社外に還元できる良い機会でもあったなと思っています。

日下：普段仕事であまり関わらない新規事業開発といった分野だったので新鮮でした。プロジェクトの進め方やメンターの方々からのフィードバックはとても勉強になりました。中山さんも恩田さんも、若いのにともしっかりされていて、素晴らしいなと思っています。世代を超えたチームでお仕事する機会はこれまであまりありませんでしたので、とても良い経験になりました。



Creating a Local Research Space for Kumamoto Students

熊本新店を熊本の学生と熊本で働く魅力を研究する交流拠点づくり

レイメイ藤井は130周年を迎え、新オフィスを設立する

「地元で働くということ」と「熊本企業の魅力」を地元高校生と考え、地域に貢献できる拠点作りに挑む

レイメイ藤井チーム



西村 慎也（株式会社レイメイ藤井 ビジネスソリューション部）

小坪 直文（株式会社レイメイ藤井 ビジネスソリューション部）

岸本 啓佑（サポートメンバー）

原 美希（サポートメンバー）

Q. 最終発表を終えて、事業案は実際に動き出しそうですか？

西村：最終発表会には社長にも来ていただいたのですが、その後改めて相談をし、実行は可能だが、再度コンテンツの整理とアップデートをする必要があるとアドバイスをいただいています。また最終発表会の記事が新聞にも掲載されたのですが、私のコメントを読まれた熊本県経営者協会の方よりご連絡があり、私たちチームのアイデアの1つでもあった「地元高校生の就職ための拠点作り」に興味を持ってくださったので、直接お会いして熊本の課題意識の共有を行いました。このように経営陣からぜひ協力できればというお話も頂いていますし、既に社内でのこのアイデアに賛同してくれる若手社員もいますので、まずは第一歩として社内領域を横断したチームづくりから進めて行きたいと思っています。

Q. 社内で1つの新しいプロジェクトを進めるには作戦が必要そうですね？

小坪：これまで社内での有志で行っているプロジェクトはありますが、こういった「前向きなプロジェクトは面白そうだ」と参加してくれる社員がいます。もちろん有志の上司に当たる各部署責任者への説明と理解は必要ですが、応援してくれる会社だと認識しています。ですから、社内でも新しいことを進めるためのハードルは決して高くはないと思っています。作戦というより、まずはどうしてこのプロジェクトを進めたいのか、をきちんと理解してもらう必要があると感じていますね。

最終発表会後の相談会でもお話ししたように、高校生が「自分の魅力を発見する」という事業アイデアは私たちの「セルフプロデュース型営業スタイル」という特徴的な営業スタイルにマッチするところがある、と思っています。また、これまでのインターンシップでは企業側が一方向的に学生たちに会社案内をするという形でしたが、今後は「学生自身がインターンシップの内容をセルフプロデュースをする」といった形をサポートする手法も取り入れていき



いと考えています。きっと今までとは違う意味で面白いプロジェクトになると思っています。

Q. 研修の中で特に印象に残ったことを教えてください。

原：メンター陣からいただく愛のあるダメ出しがありがたかったです。参加企業のどのアイデアも丸ごと秒殺されちゃうようなコメントが沢山あったじゃないですか。その一方で、ダメ出しを待っている自分もいるというか。表面的なアイデアに対しての良し悪しとかではなく、本質的なビジョンや想いに対するコメントだったので、すごく刺さるんです。私たちは、「熊本で働く魅力」というテーマを持ってプロジェクトを進めて行ったのですが「本当に地元に関心を持っていくのがいいことなのか」「現状の高卒の社会的地位をそもそも変えなきゃいけないのではないのか」など、示唆に富んだコメントを多くいただきました。それは自分たちのグループだけではなく、他のチームに対しても同様で、絶妙な組み合わせのメンター4人の方々より多く勉強させていただきました。

Q. レイメイ藤井チームは現地とオンラインとが混ざったチームでしたが、雰囲気はいかがでしたか？

岸本：他のメンバーは全員現地で、僕1人が全研修オンラインでの参加だったのですが、不自由は全く感じませんでした。反対にチームメンバーの方々が僕に気を遣っていただいたのではと感謝しています。オンライン上で、時折シビアな指摘が出た時も、同じサ



ポートメンバーの原さんが、ゆるっとした発言をしてくださって、チームの雰囲気を和らげてくださったと思います。

小坪：サポートメンバーのお二人が、私たちのグレーな回答をした時は、いい意味で遠慮なく見事に指摘してくださいました。中途半端なアイデアに対するアドバイスがとても助かりましたし、調べ物も沢山していただきました。自分たちには無い発想を持ったサポートメンバーのお二人によって、これまで社内のルールの中だけで物事を見ていたことや思い込みがあったことにも気付くことが出来ました。原：西村さんと小坪さんは、社長と直接繋がってお仕事をされていらっしゃるような方で、私の勤めている会社でそんな方々と一緒にすることはなかったのもとても刺激的でした。時折方向性や認識の違いがあったこともありましたが、そんな時は客観的に岸本さんがうまく整理してくれるというか。チームのバランスがとてもよかったと思います。

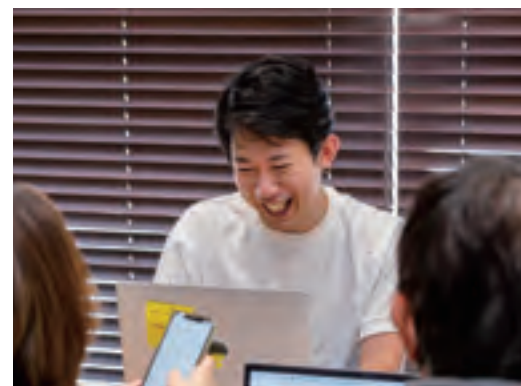
Q. プログラムの全体を振り返っていかがでしたでしょうか？

小坪：他社の方々と一緒に事業案を考え、フラットに意見を出し合うことで、自社を見直すことができたと思います。通常通り会社の仕事をしながら、というのが少し大変でしたが、ここで得た経験は何らかの形でフィードバックできるとしていますし、最終的に成果として結びつけたいと思っています。また、Project 180を通して、新しく繋がるのが出来た方達との関わり合いは今後も大

事にしていきたいと思っています。

岸本：参加前までは、サポートメンバーが熊本企業に対して、アドバイスをする立場かと思っていたんですが、そういうことではないことが分かり、メンバーとフラットに議論できたことが、とてもよかったと思っています。また今回施設・拠点づくりというアイデアだったこともあり、自分の本業の不動産の知識を活かし、そのアウトプットができる場にもなったのではと思っています。私はオンラインでの参加でしたが、今回のプロジェクトに参加したことで、オンラインでも地方の仕事に関わることができるんだという発見もありました。アイデアは発表で終了という形ではなく、実行に移して行けようとのことなので、引き続き何らかの形でプロジェクトに関わっていただけたいと思っています。





Project 180 第3期を振りかえって

若林 恵 × 山田 遊 × 鈴谷 瑞樹

田村：Project 180も今期で3回目ですが、今年度は社会システム自体が変わりゆく中で、そのシステム自体を作れ、と言われていたような状況でした。その舞台上で自分がどう振る舞うのかを提案する難しさがあったと思いますが、皆さんから見て、去年や一昨年と比べて、いかがでしたか。

山田：たしかに例年よりどの企業も提案が現実的なものだったと思います。今までは新規事業を探るときには、無邪気に大きな夢を描いていけばよかったんですけど、コロナの状況の中ではそうもいかないですね。だからこそ、今回のプロジェクトの中でヤマチクチームが、「メルカリでタケノコを売ってみた」という話。ああやってまずはすぐやれる実践から入っていくことはすごくいいな、と思っています。アイデアを出して付箋に書き出すよりも前に、実際にやってみの方が早く情報も集まる。もちろん仮説は必要だけど、そういうトライアルの繰り返しはすごく大事だと思います。

若林：コミュニティなどのテーマで人を集めて何かをやるのが難しい今、場や空間を作ってどうこうって話ができないから、余計に頭を使わなきゃいけないんですよ。そういう難しさは確かにあるので、サイズ感の収め方や、ヤマチクさんで言えば、個々の小さな実践をどう記述してスケールしていくのか、そういうアクションの取り方はやはり大事ですよ。

山田：ヤマチクさんは特に課題が本当に自分ごとじゃないですか。竹を切る人がいなければ商品は作れない。こういう切実さを持っていると、何としてでもその道を探そうと自然となっていくんですよ。

鈴谷：世界にはこれが必要なんだという大きなビジョンから話すと胡散臭く見えちゃいます。だからこそ、うちの家族がこれが必要なんだとか、うちの家業を続けていくためには絶対いるんだってところから始めて、これって世界のためになるかもしれない、というボトムアップの説明で周りをうまく巻き込んでいく、それを意識的にやれることが大事な気がします。

若林：そうですね。みんな切実さがあるはずなのに、なぜかやけに大きなビジョンから入ってしまう。そうすると、きっと自分が信じていないことを語って、結局それが自分たちに着地しない。うまくいかないとき、ビジョンを作り直すみたいなことを延々と繰り返してしまうんです。教育学者の荻谷剛彦が、日本は近代化のことで、演繹型思考が勝ってきたという話をしていて、実際に得た経験からの帰納がないままに、抽象的な命題を理解したつもりになってしまうと。つまり、まずビジョンありきで、そこから一生懸命に考え

てしまうんです。しかもそのビジョンは自分で描いたものではなくて、ほぼ海外から輸入されてきたもので、自分たちの中にその参照点がないから結局現実味がないわけですよ。自分たちでここまでやってきたとか、どういうトライアルをしていて、それがどんな意味を持つのか…なんてことを考えていないという。要するに自分たちの現状、「今ここにいる」ってことを大きな文脈に置いて、その次に何をやるのかという話をしなきゃいけないんですよ。

山田：ヤマチクさんが強いのは、「竹によって世界はどう変わるのか」という大きなビジョンと「私の竹でどう稼ぐのか」という身近なボトムアップの話が繋がっていく。必ずしも繋がる必要はないけれど、そのつながりの意識はすごく大事ですよ。



田村：最近もし新しく研究所を作るならどこか、という議論で、僕は台湾がいいって話をよくします。今までの立地の基準は、先進的な技術や良い大学の存在、もしくは投資ファンドの豊富さなどでしたが、この時代では社会がどういう風に先取ってるのかという点が変わっていくフェーズだと思っています。

若林：たしかにアメリカをはじめ多くの国では既に社会モデル自体が崩壊してしまっていて、その社会構造をアップデートしている台湾や中国がオプションとなり得ますよね。

鈴谷：社会モデルが自分たちの事業にフィットしているかどうか。つまり、プラットフォームとして一番やりやすい環境として、国や場所、地域を選んでいくというのが主流になってくると思いますし、逆に国や地域がそういう動向を踏まえたモデルづくりが必要になってくるということですよ。台湾はうまくやっていますし、すごく自由な人たちが多く、一つの価値観に縛られていない印象を持っています。

台湾の人たちには、隣の人と自分が違うという前提があり、日本のような同じ前提の人が多く社会とは大きく違う気がしています。言葉も仕事も考え方も違う、一方で、「まあ、とりあえずビール飲めや」みたいな緩さが、何かを共にやっていく上での摩擦を減らすと思います(笑)。

若林：そう、共助をどう作っていくかという点では、台湾もソーシャルセクターが強いし、アメリカも結局は草の根的に強いと思う。日本の社会が一番難しいと思うんです。

田村：白鷺電気工業チームは「心のレジリエンス」というテーマで、「心身の健康」を共助の元にどう作るのかという課題に取り組んでいました。こうしたトピックが多いのはまさに今の時代性を表していますね。

若林：そうですね。どこも健康を消費的に解決しようとする面が強くて、辟易します(笑)。何かのプログラムを買えば解決するような話ではないんですよ。これは日本社会全体の問題なのですが、人間の精神面や健康が、個人主義と個人が消費者であるという建



付の中で、知らず知らずのうちに資本主義的なドライブの中に組み込まれていくと、より管理的な社会を作ることになりかねないんです。それに、メンタルの話は仕事や人間関係が絡んでくわけで、自己責任ではないからこそ、個を越えた地域や組織などの共の問題として考えなくちゃいけない。

田村：共助をどうつくるのかというテーマで、熊本や九州は他の地域と比べても、みんなオープンだからやりやすいと思いますが、いかがですか？

鈴谷：熊本は、もともと土地として豊かで恵まれているから、外の人の存在をあまり意識していない。その一方で、恵まれているからこそ、このままでいいんじゃないともなってしまう。でもそんなに頑固ではないというところがミソで、外の意見や考えをいきなり否定はしなくても、自分なりに理解して解釈するのに少し時間がかかると感じています。ただ動き始めると早いんですよ。だからこそ世界がど

う変わっていくのかを常に意識していくことが、一番大事かもしれないですね。

田村：行動変容を仕掛けていく時の変化に対する感度ですよ。例えば「高校生の就職」というテーマについて取り組む時に、大学進学ってそもそも意味あるんだっけ?という議論が都市圏では一定層できますが、地方では難しい場合が多いですよ。

若林：当たり前すぎて、問いもしないという状況になっちゃうんですよ。時代の流れに適應していくことはもちろん大事なんだけど、すでにあるヒエラルキーに対する懐疑や、高校生を地元に関じ込めてしまっているのかもしれないという問いのなさが問題だと思っています。彼らの将来への道筋を示すことの責任の大きさや社会的な意味を意識しなくちゃいけない。Project 180では、東京や都市部のサポートメンバーが入って議論をしているけれど、そうした批判や問いの投げかけをしていかないとまずいと思います。

山田：そうですね。考えの起点を熊本の土地にどんどん絞っていくと、途端に具体性が増したり、現実的な1歩目が見えてくる

はずなんですけど、熊本の良さの定義すらもサポートメンバーがうまくできていなかったり、客観的なところから熊本で事業をやることの意味とか意義とかを評価をしないとどっちつかずになってしまうんです。都市の無意味さを理解した上で、その立場を利用してる人じゃないと、都市からの人っていう括りに意味がなくなってしまうように思います。

若林：それで都会から来たダメコンサルみたいなことになってしまうことがあるんです。悪意がなくて無邪気なだけに、ヒエラルキーの構造だけを持ってきてしまうようなことが起きちゃうわけ。だからこそ、地方同士でスワップさせることの方が面白いのかもしれないし。

田村：地域同士をつなぐコレクティブの形成ですね。Project 180がそんな役割を担い、共に社会をつくっていけるなら、日本の地方の未来は明るいものになっていきそうです。

Messages from the Organizers



熊本には燻っている火種がたくさんある。
どんだん風を送り込め。

熊本イノベーションスクール「Project 180」の第3期を受講された県内企業の皆様、そして県外からご参加いただいたサポーターの皆様には、心から感謝申し上げます。また、運営をお願いしていますリ・パブリックをはじめ、フミダス、熊本日日新聞社、ご指導いただいたメンター・講師の皆様にも、御礼申し上げます。

熊本県では、会社の原動力となり、開発から事業化、マーケティングまであらゆる部門を有機的につなぎ、他の社員を巻き込みながらイノベーションを創造する、プロデューサー型人材「社内イノベーター」の育成に取り組んでいます。このProject 180は、県内企業の次世代の後継者や経営幹部候補の皆様が、都市圏の感度の高いサポートメンバーとチームを結成し、新規事業を起こすプロセスの実践を通じて、ノウハウ習得を目指すプログラムです。

特に今期は、新型コロナウイルス感染症の影響により、例年以上にプログラムの進め方に苦慮する場面も多々あったと思いますが、オンラインツールを活用しながら試行錯誤した体験は、ウィズ・アフターコロナ社会でのビジネスにおいても必ず役立つことと思います。約4ヶ月間という限られた期間で、チーム一丸となって新規事業のアイデアを模索し、メンターや講師の方々のアドバイスを受けながら検討を重ねた体験が、それぞれに新しい発見や学びを得るきっかけとなれば幸いです。本プログラムが、今回ご参加いただいた方々や、これからイノベーション創出に取り組みたいとお考えの県内企業の皆様の一助となることを期待しております。

主催：熊本県商工労働部

熊本には燻っている火種がたくさんある。どんだん風を送り込め。これは今回Project 180の事務局に携わる中であらためて感じた想いだ。コロナという災害で日本全体が被災し、日本全体が大きく消沈している中で、ここ熊本でも同じように厳しい現状が続いている。コロナがなくても地方にいても急激な人口減少・少子高齢化など、もう可能性が残されていないのかと思わされる出来事も多い。しかし地域にもこれらの問題にも負けず消えずに燻っている火種（イノベーターの原石）は多い。ただ問題なのはこの火種を大きな炎へと発展させるためには、地元の同調主義からくる生ぬるい風や足を引っ張る逆風では駄目なのだ。必要なのは現状の熊本を無視した新しい突風（都市部人材）なのだ。今回の取り組みで火種が大きな炎へと飛躍していく機会をたくさん見せてもらった。ここに熊本の未来があると感じさせてもらった。この取り組みから生まれた炎が熊本を飛び越えて日本や社会の闇を照らす光となることを期待したい。

企画・運営：一般社団法人フミダス
代表理事 濱本 伸司



第3期目を迎えたProject 180も、熊本企業の熱い想いを持った変革を起こす経営者・社員と、それを支える首都圏サポーター、本質的な問いを容赦なく投げ続けるメンターという最強の三者タッグで4か月のプログラムを駆け抜けました。今年は、この三者による化学反応が、新しい事業づくりだけでなく、熊本企業における次代の人づくりにも寄与していたことがとても印象的でした。

Project 180は4か月のプログラムですが、それ以降も様々な形で提案事業を実現させるために活動されている企業チームもあります。Project 180は単なる事業創造プログラムではなく、熊本で挑戦する人たちが、域内外の様々な人たちとの繋がりを持って共に学び合い、地域の力を高め可能性を広げていく、そんなコミュニティになりつつあるのではないかと感じています。

企画・運営：株式会社リ・パブリック
ファシリテーター 鈴木 由香里



主催：熊本県商工労働部

①当部は、次のような取組みを通じて、商工業者の方々の育成、支援に取り組んでいます。②平成28年熊本地震で被災した企業の施設・設備の復旧の支援等による早期の事業再建。③地域への経済的波及効果の高い事業への集中支援等による県経済を牽引する中小企業の育成。④県南地域やオフィス系企業への重点化による新たな誘致戦略の推進。⑤働く人がいきいきと輝き、安心して働き続けられる「ブライト企業」の認定等による地域を支え次代を担う人材の確保・育成。



企画・運営：一般社団法人フミダス

地域の未来をつくる人材育成を主眼に高校・大学と連携した地域の担い手を育てるキャリア教育プログラムの開発や、ソーシャルイノベーターの育成を行っています。また、熊本の災害支援やまちづくりにも深く関わり、産学官連携の地域復興・地域活性化の取り組みを行っています。

RE:PUBLIC

企画・運営：株式会社リ・パブリック

イノベーションは人（イノベーター）なくしては起こらない。株式会社リ・パブリックは、未来を見据え、どのような地域や社会環境であってもより豊かで暮らしやすい社会を生み出す人を育てる会社です。持続的にイノベーションを生み出す「エコシステム（生態系）の樹立」を目指し、官公庁や地方自治体とのプラットフォームの企画・運営他、グローバルなデザインスクールの実施、企業や科学者とのフューチャーデザインラボなど、パートナーの特性や課題に応じたプログラムを提供しています。



企画・運営：株式会社熊本日日新聞社

1942年に設立し、78年間熊本の郷土紙として地域のニュースや話題、身近な情報や広告を発信しています。また熊本市内の中心部には、熊本の成長を願う様々な支援機関・団体が地域課題をサポートし、課題解決や中心市街地活性化に取り組むことのできる、コワーキングスペース「びぶれす イノベーションスタジオ」も運営しています。

Staff

田村 大	HIROSHI TAMURA	リ・パブリック
濱本 伸司	SHINJI HAMAMOTO	フミダス
鈴木 由香里	YUKARI SUZUKI	リ・パブリック
岡 千世	CHITOSE OKA	リ・パブリック
濱本 由美	YUMI HAMAMOTO	フミダス
八幡 憲子	NORIKO YAHATA	リ・パブリック
廣瀬 花衣	KAE HIROSE	リ・パブリック
長澤 功	ISAO NAGASAWA	熊本日日新聞社
町野 孝裕	TAKAHIRO MACHINO	熊本日日新聞社

Creative Staff

中山 慎介	SHINSUKE NAKAYAMA	ロゴ・ブックデザイン
甘浦 麻結	MAYU TSUZUURA	写真撮影